

# JETプログラムで 世界を救う方法を 学んだ!



仙台市立愛宕中学校外国語指導助手  
LaNi Beryl Weaver  
ラニ・バレル・ウィーバー

日本を一言で表すには「新鮮」が一番よい言葉だと考えます。多少変わった表現に聞こえるかもしれませんが、日本は、まさにその言葉通り私の生活において新鮮な変革を与えてくれた場所です。職員室の窓から見える谷の景色から、スーパーや銀行などの店員、バスの運転手さんが毎日笑顔と優しさを与えてくれることまで、すべてとても新鮮に感じます。日本は礼儀正しい国です。「いらっしゃいませー」、「ありがとうございます」や「すみません」をもうあまり使われていない国から来た私にとっては、とても新鮮に感じます。

親しい友人は私が日本に行くことを決めたとき、驚きませんでした。それは、私が旅行好きで、少々型破りなところがあると知っているからです。ほかの友達や家族からは、安全に対する用心や心配の声をたくさんもらいました。多くの人から、十代の息子が社会に順応できるかどうかや彼の教育を心配する声も上がりました。また、黒人として日本で暮らすのを心配してくれる人もいました。しかし、私たちはそのような心配を全くしていませんでした。彼らは私の息子のことも日本のこともあまり知らなかったようで、まさか息子が学校で人気者になるなどは想像もしていなかったのです。彼らは日本人が外国人に誠実な気持ちで好奇心を持っていることや、有名な黒人のピースメーカー（世界平和を目指し、活動しているような

人）、ミュージシャン、アーティスト、スポーツ選手、そしてヒップホップのおかげで、特にアフリカ系アメリカ人に興味を持っていることなど理解していなかったのです。彼らは、息子と同じような経験をしていないアメリカの子どもたちとは比べようのない教育を受けられるということが分からなかったのです。そして彼らは今、十代の黒人の少年にとって、アメリカで暮らすより日本で暮らす方がはるかに安全なのだと思います。

ブランドンがインターナショナル・スクールではなく近所にある市立の中学校に行くことを決めたとき、周りの人は驚きました。彼は、身近なところで日本文化を学びたいと思ったのです。登校初日は緊張していた様子でしたが、すぐになじみ、バスケットボール部に入部し、男友達もたく



さんでできました。私たちはすきな友達、日本での家族、そして素晴らしい同僚にも恵まれました。微妙な問題を解決するために、文化の違いを乗

り越えなければならなかったのですが、それは予想していたことです。そのおかげで、ブラントンは新たな問題の解決方法を学びました。

JETプログラムに参加したおかげで、私は英語を教える以上の機会を得ました。また、日本語だけでなくたくさんの方と学ぶチャンスもいただきました。ブラントンも一緒に来たおかげで、彼の同級生や友達にとって国際的な感覚を身に付けるいい経験になったと思います。噂によれば以前と比べて皆が頻繁に英語を使うようになったそうです。この生徒たちは初めて、ブラントンのような子どもとの交流ができたのです。もしブラントンに会っていないければ、彼らにとってブラントンのような子どもは映画やテレビを通しての印象しか知り得なかったかもしれません。ブラン



ドンにとっては今、母国語とかなり違う言語の書き方、読み方、そして話し方を学んでいます。本来自立心の強い子どもであるブラントンは、日本の中学校に通い、協調性の大切さやチームの一員になることを身近で学ぶことは興味深いことなのです。日本の文化や生活様式をよりうまく理解することができるようになりました。また、同時に、車の便利さや永遠に続くような広さ、自由時間、さまざまな部活動に同時に参加できること等、アメリカでは当たり前のことに、より感謝するようにもなりました。

これまで、「ハビタット・フォー・ヒューマニティ」チームの一員としてフィジーへ出向く等、JET参加者が主催するさまざまなプログラムに参加してきました。日本の地域社会は基金や支援物資の調達に

協力してくれました。フィジーでは新たな文化に触れ、外国から来た人々との出会いを喜んでくれる子どもたちにも出会うことができました。フィジーでは母国と日本についていろいろ教えられました。ブラントンは子どもたちの名前をカタカナで書くことを教えることができました。この子どもたちは外の世界や日本文化へ興味を持ち始めたと思います。

ブラントンを日本に連れて来たことが、世界中で起こっている国家間の対立をなくすカギを見いだす糸口となりました。その答えは子どもにあります。一人の子どもも人生を変えることで、たくさんの子どもの人生を変えることができます。いろいろな国の子どもたちが交流し、互いに理解を深め、友情が芽生えれば、大人になり選挙権を持ち、上に立つ人間になったとしても、友達の住む国を爆撃するとは思えないのです。彼らは、もっとよい選択をするのではないかと確信しています。われわれはどのようにして世界を救うのでしょうか？ それは、子どもたち一人ひとりがさまざまな文化や環境の中で教育を受けることを通じて達成されます。



アメリカ・イリノイ州シカゴ出身。大学では、社会福祉と管理学を専攻し、副専攻としてエンターテインメントを学んだ。社会福祉の修士学位を取得。旅行が大好きで、ほかの文化について学びたいと思い、来日した。また、息子に豊かな教育を経験させたいためでもある。今はずっと楽しく毎日を過ごしている。

LaNi Beryl Weaver

# 国際交流員よりも、 やりがいのある 仕事はありますか？



栃木県下野市生活課(旧石橋町生活環境課)国際交流員  
Ulrike Ermel ウルリーケ・エアメル

記事を依頼された時、あまりに伝えたいことが多すぎると思いました。二ページという限られた記事の中で、まとまったタイトルはもちろん、まとまった一つの内容を考えるのは、とても難しかったです。JET参加者の日常生活、仕事など、あまりにも話題が多すぎなのです。そこで、私の大学の先生が言った言葉を思い出しました。「日本で一週間だけ過ごした人は、その体験に関する本を一冊書きますが、日本で一カ月間過ごした人は、新聞記事くらいの分量を書きます。そして、日本で生活することになった人は、記事ほどの分量さえも書かなくなりませう」というのは、体験することすべてが、その人にとって当たり前のことになっているからです。

私は日本で生活していますが、先生の言葉とは違って、日本での生活に関する記事を書かなければなりません。

今までの二年半、国際交流員として働いていますが、この文章の中では、仕事関係の経験だけではなく、私生活についても触れようと思います。

職場と私生活のつながり、それこそが、国際交流員の生活を面白く、刺激的で、時には大変なこともあります。生き生きとしたものになっているのだと思います。私だけではなく、ほかのJET参加者の皆さんもそう思ってくれば、うれしく思います。

下野市に国際交流員がいる理由は、旧石橋町が、ヘッセン州の山地にあるディーツ

ヘルツタールと姉妹都市関係を結んでいるからです。さらに、一三年前から毎年、ミュンヘン大学の学生八人をホームステイとして受け入れながら、二週間の日本文化体験を行っています。その際、国際交流員として、彼らのお世話をします。具体的には、姉妹都市との情報交換、市役所とホストファミリーとの仲介、通訳などのような仕事です。こういう訪問団のお世話は一番大変な仕事でもあり、一番楽しい仕事です。

また、語学講座も担当しています。ドイツ語講座は二つありますが、英会話講座もあります。二〇〇五年の夏までは、石橋高校のALTと一緒に教えていましたが、今は一人で教えています。講座の雰囲気はとてもリラックスしたもので、講座を通じて、友人関係のネットワークを広げることが出来ます。過去二年間、参加者の皆さんとやったクリスマスパーティーは本当に素晴らしかったです。手作りケーキ、クッキーや料理を食べたり、歌を歌ったり、ゲームをしたり、しゃべったりと、楽しくクリ



↑中学生派遣、ドイツの姉妹都市へ。ライン川にて

スマスを迎えられました。

一番気に入っているのは、私の趣味であるエアロビクスを仕事としてやっている、エアロビクス教室です。ほかには、月に二、三回、学校や保育園を訪問しています。

私の個人的なイベントとして、「ウリさんの世界の旅」というものを開催していますが、参加者の数は次第に増えてきています。「世界の旅」とはどのようなものかというと、自分の故郷や伝統、家庭料理を紹介してくれる外国人を招待し、参加者が、作りやすく、手に入れやすい材料を使って、招待した講師と一緒に料理をしたり、いろいろなテーマについて議論したりします。この毎月開催される「世界の旅」が人気のあるファミリーイベントになり、大変うれしく思っています。

その特別編として、旧石橋町民の方々に、ドイツでどのようにお祝いをするのか、実際に体験してもらったこともあり、私もあります。私は学生時代、故郷の幼なじみたちと一緒に、カーニバルクラブのダンスグループに所属して

↓保育園での入学袋づくり



いましたが、彼女たちが私を訪ねて来た際、一緒に旧石橋町でドイツのカーニバルパーティーを開催しよう、というアイデアが生まれたのです。私はそれを実現できるか不安でしたが、結果は素晴らしいイベントになりました。

彼女たちは、帽子、ブーツ等の伝統的な衣装や小さなプレゼント、手作りダンスをドイツから持ってきてくれました。お客さん一〇〇人ぐらいが、初めて旧石橋町で開催されたイベントを楽しんでくれました。このようなイベントを実現するためには、ネットワークが必要です。それを作り始めてから、だんだんと広がっていて、とても国際交流員にとって役に立つ道具となります。

そしてそのような緊密な協力関係は、私の周りにいる人々の「取り組む姿勢」に基づいてのみ生まれます。私がいつも驚くのは、何回でも、どんなことに対してでも、多くの感動を与えられることです。それは一時的なことだけではなく、影響力のある、持続的な現象です。どんなお祭りでも、どんな行事でも助けてくれる多くの人々がいて、私が詳しく説明をしなくても、サポートをお願いしなくても、いつでもすぐ協力してくれます。これらのことは素晴らしい活動であり、アンガージュマン（社会参加）だと私は思います。そういったことが最もうれしく思えます。まさにこの彼らの「取り組む姿勢」が、仕事だけ

でなく、生活そのものを特別な経験にしてくれるものなのです。

石橋の人々と同じくらい感激していた私のドイツの友人たちは、昨年二度目の来日を果たし、今回は、ドイツ・バーベキューパーティーを開催しました。ドイツビールとソーセージはもちろん、ザウアクラウトやマッシュポテト、ゲーム、ポロネーゼなどなど。ポロネーゼといえば、カーニバルパーティーをやっているから、ほかの国際交流に関するイベントがある時の、定番のプログラムになっています。「人でできた鎖」を作り、テーブルや椅子の上で踊ります。最後に、内心は誰もお別れをしたくありませんが、解散します。ありがとう、みなさん。



Ulrike Ermel

ドイツ・ライプチヒ出身。ライプチヒ大学で日本学などを専攻。いつか日本で仕事をしたいと思い、JETプログラムに参加。現在、下野市で、姉妹都市関係、語学講座、エアロビクス教室、国際交流イベントを開催するほか、弓道にも挑戦している。帰国する際にはお土産として初段を持ち帰りたい。



## LaNi Beryl Weaver

negotiate and handle problems.

Coming to Japan on the JET Programme has afforded me an opportunity to teach more than English and to learn much more than Japanese. Bringing Brandon along has been an eye opening experience for his classmates and friends whom I am told, have used much more English since he has arrived. For the first time, they have had an opportunity to interact with a child with whom the only impression they would have had otherwise about children like him, may have come from television or the movies. Brandon is learning to speak, read and write in a very different language. For an inherently independent child, it has been interesting for him as he learns first hand what it is like attending a Japanese junior high school and the importance of “group think” and being a part of a team. He has developed a better understanding about the Japanese culture and way of life. He has also developed more appreciation for the things that he took for granted in the United States such as, the convenience of a car, seemingly unlimited space, free time, and the opportunity to participate in school intellectual clubs and various sports teams simultaneously.

We have participated in programs organized by the JET community such as the Habitat for Humanity team to Fiji. Our Japanese community was very generous in helping us to raise funds and supplies. We experienced yet another culture with children who were fascinated and excited to see so many people from different countries. In Fiji, we taught the village school children about our countries and Japan. Brandon was able to show some of the children how to write their names in katakana. These children now have a new interest in the outside world and in Japanese culture.

Bringing Brandon to Japan has helped me to learn the secret to ending world strife between nations. The answer lies in our children. Changing the life of one child changes the lives of many. When children from different worlds are given an opportunity to interact and to develop understanding and friendships, it is quite unlikely that as adult voters and leaders they would be so willing to bomb the home of their friends. I am convinced that they would make better choices. So, how do we save the world? Through cultural and environmental education, one child at a time.

英語

## Ulrike Ermel

Am besten gefällt mir allerdings, dass ich mein Hobby zu einem Teil meiner Arbeit machen konnte, denn in regelmässigen Abständen schreibe ich einen 4- bis 8wöchigen Aerobickurs aus.

Ein- bis zweimal im Monat stehen natürlich auch Kindergarten-, Grundschul- und Mittelschulbesuche auf dem Programm.

Mein eigenes monatliches Event “Uli-san no sekai no tabi” (Ulis Weltreise) ist zu einem gut besuchten Bestandteil meiner Arbeit geworden. Hierzu lade ich eine/n weitere/n Nichtjapaner/in ein, die ihr bzw. sein Land, (Ess-) Kultur und Traditionen vorstellt. Dies geschieht über ein einfach herzustellendes Hausrezept, welches wir dann in Gruppen gemeinsam kochen und dann natürlich auch gemeinsam geniessen. Dies ist mittlerweile zu einer beliebten Wochenendaktivität für die ganze Familie geworden.

Während 2 Sonderausgaben erlebten die damaligen Ishibash'ler, wie in Deutschland so richtig gefeiert wird. Meine Freundinnen aus Deutschland, mit denen ich einige Jahre in unserem heimischen Faschingsverein als Funkengarde tanzte, besuchten mich und die Idee einer deutschen Karnevalsparty war geboren. Die Mädels brachten originale Faschings kostüme incl. Hut und Stiefel, selbstchoreografierte Tänze und Überraschungen mit, und rund 100 Gäste erfreuten sich an einem in meiner Stadt noch

nicht dagewesenem Event.

Um solche Veranstaltungen zu realisieren, ist das Netzwerk, welches man sich im Laufe der Zeit zusammens- trickt sehr, sehr hilfreich und unbedingt notwendig. Und dies funktioniert nur aufgrund der Begeisterungsfähigkeit der Menschen um mich herum. Es ist immer wieder erstaunlich, wie einfach, schnell, doch vor allem nachhaltig die Menschen zu begeistern, zu beeindrucken und mit welchem Engagement sie bei der Sache sind. Egal welches Fest gerade stattfindet, welche Veranstaltung organisiert werden muss, Helfer, die mich unterstützen sind sofort zur Stelle, ohne, dass ich lange darum bitten muss. Gerade dieses soziale Engagement ist eine sehr schätzenswerte Sache, die sowohl die Arbeit als auch das Leben zu einer ganz besonderen Erfahrung machen.

Mindestens genauso begeistert wie die Bürger des früheren Ishibashi waren meine Gäste von Japan und seinen Bewohnern und machten sich in diesem Jahr ein zweites Mal auf den Weg nach Fernost, und wir realisierten eine Deutsche Grill-Party mit Würstchen, Sauerkraut, Kartoffelbrei, deutschem Bier, Partyspielen und Polonaise. Schon seit dem Karneval ist die Polonaise zu einem festen Programmteil bei Abendver- anstaltungen geworden, auf denen zum Ende noch einmal Stimmung mit einer solchen Menschenkette über Tische und Bänke gemacht wird und alle nach draussen verabschiedet werden...doch keiner möchte gehen!

ドイツ語

## On the JET Programme, I learned How to Save the World!

How would I describe Japan in one word? The best word that I can think of is: "Refreshing." This may sound odd but that is exactly what Japan has been to me—a refreshing adjustment in my lifestyle. From the beautiful valley upon which I look daily from my staff room window to the smiling faces and attentiveness I receive as I go about my daily business at the grocer, the bank, and even as I exit the bus, everything is refreshing. Japan knows courtesy. I find this quite refreshing too, since I come from a country where "Welcomes!", "Thank you's" and "pardon me's" are not always so plentiful these days.

My closest friends were not too surprised that I chose to come to Japan because they know that I love to travel and they know that I am a bit unorthodox. From some loved ones I received many exclamations of caution and concern for my safety. Many people were concerned about my teenage son's ability to adapt socially and they expressed concern for his educational needs. Others were concerned about how we might be treated as Black Americans living in Japan. We did not share their fears. These people apparently did not know my son well and they did not know Japan. They did not

imagine that he would become the most popular child at school. They did not understand that Japanese people have a sincere curiosity about foreigners and that many have a fascination with Black Americans due to famous Black peace makers, musicians, artists, athletes, and hip hop. They could not understand that he would receive an education that could not be matched by another child living in the United States who had not a similar experience. They also did not consider that today, Japan is actually a much safer place for a Black American teenager.

People were surprised when Brandon chose to attend the local public junior high school instead of the closest international high school. He was interested to learn about Japanese culture first hand. Although he expressed a little anxiousness his first day of school, it was not long before he was more comfortable in his classroom, a respected member of his basketball team and feeling like one of the guys. We have acquired wonderful friends, surrogate relatives, and great coworkers. We had to adjust to some cultural differences in handling delicate issues but this we expected. As a result, Brandon has learned new ways to

## Der wahrscheinlich dankbarste Job der Welt... Koordinator für Internationale Beziehungen

In dem Moment als ich für den JET-Forum-Artikel zusagte, hatte ich so viele Gedanken im Kopf, womit ich diese 2 Seiten füllen könnte, sodass es mir letztendlich schwerfällt, einen runden Titel mit ebenso rundem Inhalt zu verfassen. Es gibt einfach zu vieles zu berichten, was das Leben eines JETs ausmacht und ein Kommentar meiner Uni-Professorin fasst das Ganze recht gut zusammen, meine ich: Erlebt man Japan eine Woche lang, schreibt man ein Buch, verlebt man einen Monat in Japan schreibt man einen Zeitungsartikel. LEBT man in Japan, schreibt man gar nichts mehr. Doch bleibt mir nichts anderes übrig als nun doch einen Artikel schreiben zu müssen ☺

Meine Erfahrungen während meiner nun schon zweieinhalb Jahre als CIR im Rathaus Ishibashi (mein Arbeitsplatz vor der Fusion zur Stadt Shimotsuke-shi) möchte ich mit jenen verknüpfen, die sich nicht unbedingt im Arbeitsumfeld abspielen, aber doch irgendwo zu einem Stück Arbeit werden und genau diese Überschneidung macht das Leben eines CIRs, hoffentlich nicht nur in meinem Fall, interessant, spannend, manchmal auch ein wenig anstrengend, aber zweifelsohne lebendig und somit lebenswert.

Der Grund für eine CIR Stelle hier in Shimotsuke-shi (60 000 Einwohner) ist die Städtepartnerschaft mit Dietzhölztal, einer Kleinstadt im hessischen Bergland. Auch gibt es seit 13 Jahren einen Sommersprachkurs mit ca. 6-8 Studenten aus München, die 2 Wochen in Gastfamilien verbringen und

japanische Kultur zum Anfassen erleben.

Meine Aufgabe besteht darin, diese Austausche zu betreuen: die gesamte Kommunikation wie Teilnehmerlisten, Besuchsablauf, Vermittlung der Gastfamilien, Dolmetschen während des Besuches, nicht nur bei offiziellen Anlässen sondern während des ganzen Programms, Rund-um-die-Uhr-Betreuung, Mittler zwischen den Gästen und dem Rathaus und den Gästen und den Gastfamilien. Dies alles wird über den CIR kommuniziert und ist sicherlich eine der anstrengendsten aber zweifelsohne auch einer der spannendsten Aufgaben.

Neben der Städtepartnerschaft gibt es zwei Deutschkurse für Erwachsene, einen Nachmittags- mit ca 5 Teilnehmern und einen Abendkurs (ca. 10-15 Teilnehmer). Meine "Schüler" kommen regelmässig, sind sehr, sehr ehrgeizig und erledigen Hausaufgaben fleissig. Auch gehört ein wöchentlicher Englischkurs, den ich bis zum Sommer 2005 noch mit der englischen ALT der Senior High School durchgeführt habe, zu meinem Arbeitsinhalt. In den Sprachkursen herrscht eine lockere und entspannte Atmosphäre. Freundschaften bzw. Netzwerke unter den Teilnehmern sind ein schöner Nebeneffekt. Bei den Weihnachtsfeiern aller Sprachkurse in den letzten beiden Jahren haben sich alle so richtig ins Zeug gelegt und mit selbstgemachten Köstlichkeiten, Weihnachtsliedern und fröhlichem Beisammensein war dies eine gelungene und wertvolle Sache.